

資料集

資料集はしがき

この研究のためのインタビューや調査で入手した貴重な資料を公開する。

第1は、藤田恵美氏へのインタビューの主な内容である。

氏へのインタビューを行ったのは、2009年5月31日（日）であった。場所は千葉県松戸市にある藤田氏の自宅である。このインタビューが実現したのは、氏の教え子であり、当時愛知大学教授であった顧明耀氏のお力添えによるものであった。

筆者が顧氏のことを知ったきっかけは、1999年に学術訪問として広島大学に訪れた中国中央教育科学研究所の宋恩栄氏の依頼で、当時県立広島大学教授であった顧明耀氏に手紙を届けたことであった。顧氏は、北京對外貿易学院東方語言系日本語コースの出身で、『新日漢大辞典』（北京出版社、2002年）の主編者の一人であった。この時のご縁が十年後に科研テーマと繋がるとは夢にも思っていなかった。

2009年5月、課題「中日国交断絶期の日本語習得者に関する研究」が科研費を獲得することができた。頭に顧氏が浮かび、直ちに愛知大学に顧氏を訪ねた。当時、顧氏は愛知大学『中日大辞典』の改訂作業に携わっておられた。多忙にもかかわらず、筆者の話に耳を傾けて下さり、藤田恵美氏に紹介して欲しいという依頼を快く受けて下さった姿は、いまでも鮮明に覚えている。それからおよそ十日後、顧氏と共に藤田氏を訪問したのである。

その日は生憎の雨模様であったが、藤田氏のご息女が最寄りの駅まで私たちは迎えに来て下さり恐縮した。藤田氏は八十歳前とは思えないハリのあるお声で、インタビューに応じて下さった。また、交通事故で足を痛めた直後にも拘わらず、筆者のために一階と二階を行き来しては資料を探して下さったことも忘れられない。5、6時間に及んだ滞在時間の間、藤田氏をはじめご家族の優しさとおだやかさを終始感じた。

このインタビューから4年経った。当初の計画ではこの4年間に、藤田氏のおられた北京對外貿易学院も研究の対象として扱うつもりであったが、着手してみると、この研究は思っていた以上に大きな山であることに気づいた。本丸ともいふべき、北京大学や北京對外貿易学院を研究の俎上に載せるには、その前にやらなければならないことが次々と出て来たのである。そのため、現時点では、藤田氏、陳濤、汪大捷など北京對外貿易学院の日本語教師についてもこれから取り組むべき課題として筆者の目の前にある。引き続きこの大きな山への挑戦を続ける覚悟である。

今回は、資料としてインタビューの主な内容を以下に収録することとする。

第2は、建国初期の日本語教科書である。

新中国では、高等教育機関の日本語教科書として初めて出版されたのは魏敷訓を中心として編集された、北京大学東方語言系日語教研室編『大学一年級日語課本』（北京：商務印書館、1959年12月）で、1964年には『日語』（第1冊）として改定出版された。しかし、この教科書は大学の教養科目としての日本語の教科書であり、専門科目としての日本語の教科書はその4年後、陳信徳を主として編まれた、北京大学日語教研室編『日語』（第1冊～第3冊、北京：商務印書館）である。第1冊は一年生前期の教科書として1963年9月に、第2冊は一年生後期の教科書として1964年3月に、第3冊は二年生前期の教科書として1964年11月に出版した。以降引き続き出版されなかったのは、おそらく文化大革命

命の影響であろう。

また、上述した教科書のほか、陳信徳編著『現代日本語実用語法』（上冊 1958 年 9 月，下冊は 1959 年 3 月，北京：時代出版社），同『科技日語自修讀本』（北京：商務印書館，1960 年），陳濤等編輯『日漢辞典』（北京：商務印書館，1959 年），周潔如編『日語会話』（北京：商務印書館，1963 年），李統漢編著『日語句子結構分析』（北京：商務印書館，1964 年），尚永清等編『日語學習文選』（第一集，北京：商務印書館，1964 年）という参考図書がある。

出版物が出る前，各日本語教育機関は自らガリ板の教科書を作った。現存のものは極めて少ないが，筆者が見つけたものの中で，もっとも古いのは，北京大学東語系『基礎日本語教科書』（1957-58 年第一学期）である。そのほか，北京大学東方語言系『日三分析』（1958-59 学年第一学期），同『日本語一年教材 第一至十五課』（1960 年），同『日本語二年級教材（日二詞彙）第一課至十課』（1960 年），同『日四郵材』（1960 年），同『日五分析課文』（1960 年），林全莊編著『医業專業日語語法』（上，下冊，四川省中心図書館委員会・成都生物製品研究所印，1962 年），浙江大学『日語課本』（1962 年）がある。

北京大学が編集したガリ版刷りの教科書は，北京大学附属図書館，北京大学日本語学科附属図書室には所蔵されていなかった。筆者は多くの図書館を調査した結果，上海図書館分館（旧館）でこれを見出した。また，中国国家図書館にも何冊かあるが，上海図書館ほど多くない。これは当時の日本語教育の到達点を知る上で非常に重要な資料である。

これら教科書から，大まかに 1950 年代まではガリ板教科書が主流で，1960 年代には出版された日本語教科書が主流であったことが分かる。ここでは，今回発掘した 1960 年の 2 冊のガリ板教科書を紹介をする。1960 年のガリ板教科書は 1950 年代の試行錯誤をへて熟成されたものであると考えたからである。

①北京大学東方語言系『日本語一年教材 第一至十五課』（1960 年）

②同『日本語二年級教材（日二詞彙）第一課至十課』（1960 年）

実際，①を北京大学東語系『基礎日本語教科書』（1957-58 年第一学期）と比較すると，かなり簡素化したことが分かる。重点を絞るより系統的な教科書が開発されたとみられる。

これらガリ板教科書から，3 つの特徴が見られる。

1 つは，教材の内容において政治的イデオロギーが濃厚であることである。中国共産党，ソ連，社会主義理念などを取り扱ったものが多い。

2 つは，文体において，小説や随筆，声明文などさまざまなものを取り入れ，多様な文体を学べるような配慮が見られる。

3 つは，現在の日本語教科書では見られないこととして，初級の段階はカタカナ表記となっていることがある。これは当時の日本の小学校教科書の影響と思われる。